Ｓうつスケール，段取りと実行，スムースな身辺動作，足腰の衰え，交通手段の利用，感覚器官の衰えの標準偏回帰係数が有意であった．

Table 3 が示すように最新情報機器の使用の因子には，外出頻度，満足感，心理的安定，ＧＤＳうつスケール，段取りと実行，スムースな身辺動作，足腰の衰え，交通手段の利用，感覚器官の衰えの標準偏回帰係数が有意であった．

Table 4 が示すように展望的記憶の因子には，生活のハリ，ＧＤＳうつスケール，スムースな身辺動作，感覚器官の衰え，電話の利用の標準偏回帰係数が有意であった．

Table 5 が示すように環境認知の因子には，心理的安定，家計の管理，段取りと実行，出版物を読む，電話の利用の標準偏回帰係数が有意であった．

Table 6 が示すように自伝的記憶の因子には，性別，教育年数，心理的安定，ＧＤＳうつスケール，段取りと実行，交通手段の利用，感覚器官の衰え，出版物を読む，の標準偏回帰係数が有意であった．

Table 7 が示すように記憶補助の因子には，性別，家計の管理，他者との交流，出版物を読む，電話の利用の標準偏回帰係数が有意であった．

Table 1 ①表情認知の因子

独立変数	自由度	有意水準	標準偏回帰係数	
年齢	1	0.8971	0.00312	
性別	1	0.9303	0.00229	
教育年数	1	0.4975	0.01751	
健康状態	1	0.3595	0.02341	
外出頻度	1	0.6057	−0.01221	
満足感	1	0.0966	−0.04330	
心理的安定感	1	0.6741	0.01055	
生活のハリ	1	0.0215	0.06368	*
歩行総得点	1	0.0223	−0.07914	*
GDS総得点	1	0.8477	−0.00583	
家計の管理	1	0.0016	0.07832	**
掃除，洗濯，家事	1	0.5148	0.01500	
他者との交流	1	0.1781	−0.03361	
段取りと実行	1	0.4664	−0.02069	
スムースな身辺動作	1	0.5195	0.01654	
足腰の衰え	1	0.6242	0.01559	
交通手段の利用	1	0.4874	0.01562	
感覚器官の衰え	1	0.0005	0.07942	***
出版物を読む	1	0.3956	0.02049	
電話の利用	1	0.0001	−0.10060	***

* p<.05 **p<.01 ***<.001

Table 2 ②記憶の因子

独立変数	自由度	有意水準	標準偏相関係数	
年齢	1	0.2467	-0.02506	
性別	1	0.7686	0.00690	
教育年数	1	0.7414	0.00764	
健康状態	1	0.7476	0.00738	
外出頻度	1	0.0097	0.05488	**
満足感	1	0.0112	-0.05932	*
心理的安定感	1	0.0001	0.15686	***
生活のハリ	1	0.3065	0.02538	
歩行総得点	1	0.6011	0.01623	
GDS総得点	1	0.0001	0.19603	***
家計の管理	1	0.8167	0.00516	
掃除，洗濯，家事	1	0.2340	0.02459	
他者との交流	1	0.6892	-0.00895	
段取りと実行	1	0.0001	-0.11301	***
スムースな身辺動作	1	0.0001	0.12969	***
足腰の衰え	1	0.0023	0.08715	**
交通手段の利用	1	0.0109	-0.05139	*
感覚器官の衰え	1	0.0002	0.07602	***
出版物を読む	1	0.5383	0.01332	
電話の利用	1	0.1741	0.02893	

* p<.05 **p<.01 ***<.001

Table 3 ③最新情報処理機器の因子

独立変数	自由度	有意水準	標準偏相関係数	
年齢	1	0.0001	0.12836	***
性別	1	0.0001	0.11634	***
教育年数	1	0.0002	−0.08973	***
健康状態	1	0.7790	−0.00672	
外出頻度	1	0.9516	0.00134	
満足感	1	0.1277	0.03719	
心理的安定感	1	0.0061	0.06458	**
生活のハリ	1	0.0001	−0.12959	***
歩行総得点	1	0.0911	−0.05481	
GDS総得点	1	0.7471	−0.00916	
家計の管理	1	0.9003	−0.00291	
掃除，洗濯，家事	1	0.6736	−0.00909	
他者との交流	1	0.7089	−0.00873	
段取りと実行	1	0.0001	0.12763	***
スムースな身辺動作	1	0.1521	0.03447	
足腰の衰え	1	0.1268	0.04553	
交通手段の利用	1	0.9710	−0.00076	
感覚器官の衰え	1	0.2245	0.02590	
出版物を読む	1	0.0047	−0.06402	**
電話の利用	1	0.0212	0.05124	*

* p<.05 **p<.01 ***<.001

Table 4 ④展望的記憶の因子

独立変数	自由度	有意水準	標準偏相関係数	
年齢	1	0.2540	−0.02717	
性別	1	0.3648	0.02340	
教育年数	1	0.1237	−0.03926	
健康状態	1	0.8208	−0.00572	
外出頻度	1	0.4074	0.01936	
満足感	1	0.3415	0.02449	
心理的安定感	1	0.2519	−0.02841	
生活のハリ	1	0.0314	−0.05886	*
歩行総得点	1	0.3051	−0.03507	
GDS総得点	1	0.0430	0.06069	*
家計の管理	1	0.8623	0.00425	
掃除，洗濯，家事	1	0.1992	0.02921	
他者との交流	1	0.1867	−0.03256	
段取りと実行	1	0.6978	−0.01090	
スムースな身辺動作	1	0.0001	0.10399	***
足腰の衰え	1	0.5535	0.01863	
交通手段の利用	1	0.0973	−0.03687	
感覚器官の衰え	1	0.0001	0.17332	***
出版物を読む	1	0.0545	0.04585	
電話の利用	1	0.0144	−0.05741	*

* p<.05 **p<.01 ***<.001

Table 5 ⑤環境認知の因子

独立変数	自由度	有意水準	標準偏相関係数	
年齢	1	0.5665	−0.01348	
性別	1	0.1764	−0.03446	
教育年数	1	0.6215	−0.01242	
健康状態	1	0.3962	−0.02114	
外出頻度	1	0.9799	−0.00058	
満足感	1	0.7398	0.00844	
心理的安定感	1	0.0182	0.05782	*
生活のハリ	1	0.0930	−0.04534	
歩行総得点	1	0.1702	0.04630	
GDS総得点	1	0.1725	0.04036	
家計の管理	1	0.0001	0.11416	***
掃除，洗濯，家事	1	0.1032	−0.03660	
他者との交流	1	0.3574	−0.02240	
段取りと実行	1	0.0026	−0.08366	**
スムースな身辺動作	1	0.9833	−0.00053	
足腰の衰え	1	0.1456	0.04518	
交通手段の利用	1	0.2774	−0.02383	
感覚器官の衰え	1	0.4587	0.01644	
出版物を読む	1	0.0192	0.05513	*
電話の利用	1	0.0002	−0.08564	***

* p<.05 **p<.01 ***<.001

Table 6 ⑥自伝的記憶の因子

独立変数	自由度	有意水準	標準偏相関係数	
年齢	1	0.5033	−0.01603	
性別	1	0.0001	−0.10931	***
教育年数	1	0.0174	−0.06100	*
健康状態	1	0.4028	−0.02123	
外出頻度	1	0.2380	−0.02772	
満足感	1	0.0778	0.04567	
心理的安定感	1	0.0187	0.05867	*
生活のハリ	1	0.2634	−0.03075	
歩行総得点	1	0.7936	−0.00900	
GDS総得点	1	0.0044	−0.08591	**
家計の管理	1	0.6914	−0.00978	
掃除，洗濯，家事	1	0.9555	0.00128	
他者との交流	1	0.2452	−0.02881	
段取りと実行	1	0.0076	0.07542	**
スムースな身辺動作	1	0.9718	0.00090	
足腰の衰え	1	0.9674	−0.00129	
交通手段の利用	1	0.0115	0.05655	*
感覚器官の衰え	1	0.0078	−0.06015	**
出版物を読む	1	0.0123	−0.06003	*
電話の利用	1	0.8438	0.00464	

* p<.05 **p<.01 ***<.001

Table 7 ⑦記憶補助の因子

独立変数	自由度	有意水準	標準偏相関係数	
年齢	1	0.1942	−0.03053	
性別	1	0.0001	−0.11061	***
教育年数	1	0.1682	−0.03469	
健康状態	1	0.0596	0.04697	
外出頻度	1	0.8693	0.00380	
満足感	1	0.2584	0.02873	
心理的安定感	1	0.6087	0.01253	
生活のハリ	1	0.1759	−0.03653	
歩行総得点	1	0.6184	0.01682	
GDS総得点	1	0.0930	−0.04971	
家計の管理	1	0.0001	−0.10112	***
掃除，洗濯，家事	1	0.7978	0.00576	
他者との交流	1	0.0001	−0.11061	***
段取りと実行	1	0.6012	0.01448	
スムースな身辺動作	1	0.0932	−0.04207	
足腰の衰え	1	0.4337	0.02430	
交通手段の利用	1	0.2825	0.02359	
感覚器官の衰え	1	0.7054	0.00839	
出版物を読む	1	0.0001	−0.09522	***
電話の利用	1	0.0006	0.07907	***

* p<.05 **p<.01 ***<.001

これらの結果から，主観的な日常認知・記憶機能に，ＱＯＬ，うつ状態，さまざまなＡＤＬ下位尺度が密接に影響することが示唆された．そして，主観的に記憶機能が低下していると感じている者は，日常生活上のＡＤＬのさまざま

な側面において不自由を感じている可能性が示された.

引用文献

Au, R., Joung, P., Nicholas, M., Kass, R., Obler, L. K., & Albert, M. L. 1995 Naming ability across the lifespan. *Aging and Cognition,* **2**, 300-311.

Broadbent, D. E., Cooper, P. F. Fitzgerald, P., & Parkes, K. R. 1982 The cognitive failures questionnaire(CFQ) and its correlates. *British Journal of Clinical Psychology*, **21**, 1-18.

Crook, T. H. & Larrabee, G. J. 1990 A self-rating scale for evaluating memory in everyday life. *Psychology and Aging*, **5**, 48-57.

Crook, T. H., Feher, E. P., & Larrabee, G. J. 1992 Assessment of memory complaint in age-associated memory impairment: The MAC-Q. *International Psychogeriatrics*, **4**, 165-176

権藤恭之・石原　治・中里克治・下仲順子・Leonard W. Poon　1998　心的回転課題による高齢者の認知処理速度遅延の検討　心理学研究, **69**, 393-400.

石原　治　2000　高齢者の記憶　太田信夫・多鹿秀継（編）記憶研究の最前線：21世紀への提言 北大路書房 Pp.251-267

石原　治　1997　高齢者の記憶　下仲順子（編）老年心理学 培風館 Pp.30-39

石原　治・権藤恭之・Leonard W. Poon 2002　短期・長期記憶に及ぼす加齢の影響について　心理学研究, **72**, 516-521.

石原　治・権藤恭之・中里克治・下仲順子・厳島行雄　1998　四則演算の処理：成人に老人を加えての検討　発達心理学研究, **9**, 201-208.

Kausler, A. W. 1994 Learning and memory in normal aging. New York: Academic Press.

Larrabee, G. J. & Crook, T. H. 1989 Dimensions of everyday memory in age-associated memory impairment. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **1**, 92-97.

Perlmutter, M. 1978 What is memory ageing the ageing of? *Developmental Psychology*, **14**, 330-345

Reason, J. 1993 Self- report questionnaires in cognitive psychology: have they delivered the goods? In A. Baddeley & L. Weiskrantz (Eds), Attention: selection, awareness, and control. Oxford: Clarendon Press. Pp. 406-423.

Zacks, R. T., Hasher, L., & Li. K. Z. H. 2000 Human Memory In F. I. M. Craik, & T. A. Salthouse (Eds.), The handbook of aging and cognition, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc. Pp. 293-358.

5　住環境と生活への満足度との関係について

分担研究者　下垣　光　（日本社会事業大学専任講師）

研究要旨：本研究では住環境と生活への満足感との関係を，全調査協力者および心理的に良好でない対象者という二側面から分析を行い検討した．その結果，住環境の満足感と生活への満足度とに深い関わりがあることが示唆された．さらに，心理的に良好でない対象者においては，自覚健康度が低下している者ほどその関係がより深いということが示唆された．

【　目的　】

住居は人間のどの発達段階においても中心的な経験の場である．しかも，加齢にともない人が家において過ごす時間は増加する．このことは，健康観の変化，空間における能力の低下や行動機会や役割の減少を反映すると同時に，自宅への愛着感の増加を反映していると考えられる．そして，住居への満足感や現状への満足感が高齢者の幸福感を高めるといわれている（Lawton & Cohen,1974).

本研究では高齢者における住環境への満足感と主観的 QOL に，どのような関係があるかを検討することを目的とした．そこで，調査結果を二つの側面から整理を試みた．まず，全調査協力者に関して，三つの年齢区分に分けて検討を行なった．次に，心理的に良好でないと思われる高齢者について検討を行なった．

【　方法　】

調査対象者は,東京都世田谷区梅丘および豪徳寺の全域と代田 1～3 丁目に在住の，65～80 歳の全住民 3555 名であった．調査期間は 2001 年 11 月 12 日から 12 月 23 日であり，個別訪問調査により行なった．調査項目は，以下のようなものであった．人口統計的特性の確認項目．主観的 QOL 尺度（石原・内藤・長嶋，1992).「現在の満足感」,「心理的安定感」,「生活のハリ」の 3 因子が確認さ

れている 12 項目．主観的健康感 1 項目．老人用うつスケール（GDS）短縮版（矢冨，1994）17 項目．「近隣の自然」，「近所への満足」，「永住の意思」，「自室への満足」，「住まいへの満足」など，住環境への満足感に関する 5 項目．調査対象者 3555 名のなかで調査協力者は 2358 名であった（回収率 66.3%）．

主観的 QOL 尺度（問 8．1～12），住環境への満足感に関する項目（問 8．13～17）はともに「はい」を 3 点，「どちらでもない」を 2 点，「いいえ」を 1 点（問 8．5～8 に関しては「はい」を 1 点，「いいえ」を 3 点）に得点化した．その合計点をそれぞれ QOL 得点，住環境への満足得点とした．GDS 項目（問 10．1～17）は「はい」を 2 点，「いいえ」を 1 点に得点化し，合計点を GDS 得点とした．

（1）全調査協力者についての分析結果

主観的 QOL 尺度質問項目，および住環境への満足感に関する項目への回答に欠損のない 2274 名を分析対象とした．対象者は年齢によって 65～69 歳，70～74 歳，75～80 歳の 3 群に分け，65－69 群，70－74 群，75－80 群とした（Table1）．

Table1 分析(1)の対象者数

	65-69歳	70-74歳	75-80歳	計
男性	377 16.58%	308 13.54%	217 9.54%	902 39.67%
女性	548 24.10%	447 19.66%	377 16.58%	1372 60.33%
計	925 40.68%	755 33.20%	594 26.12%	2274 100.00%

QOL 得点について，年齢×性の分散分析を行なった．その結果，年齢（$F(5, 2268)=6.50$, $p<.01$），性（$F(5, 2268)=13.63$, $p<.001$）ともに主効果が得られたが，交互作用は認められなかった（Figure1）．多重比較（Tukey 法）の結

果,65－69群の方が70－74群と75－80群よりQOL得点が高かった(Figure2).
性別では男性の方が女性より高かった（Figure3).
住環境への満足得点について，年齢×性の分散分析を行った．その結果，年齢（F（5，2268）=5.78，p<.01)，性（F（5，2268）=5.19，p<.05）ともに主効果が得られたが，交互作用は認められなかった（Figure4)．多重比較の結果，住環境への満足得点が75－80群の方が65－69群より高かった（Figure5)．性別では女性の方が男性より高かった（Figure6).

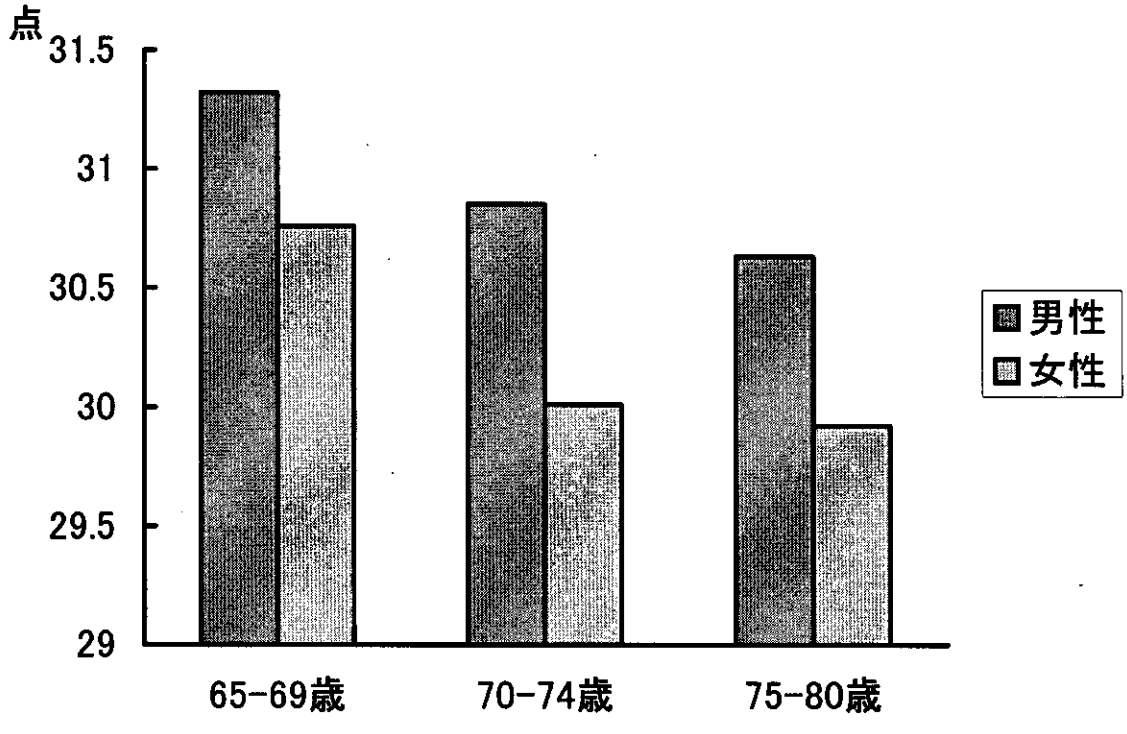

Figure1　性・年齢別QOL得点

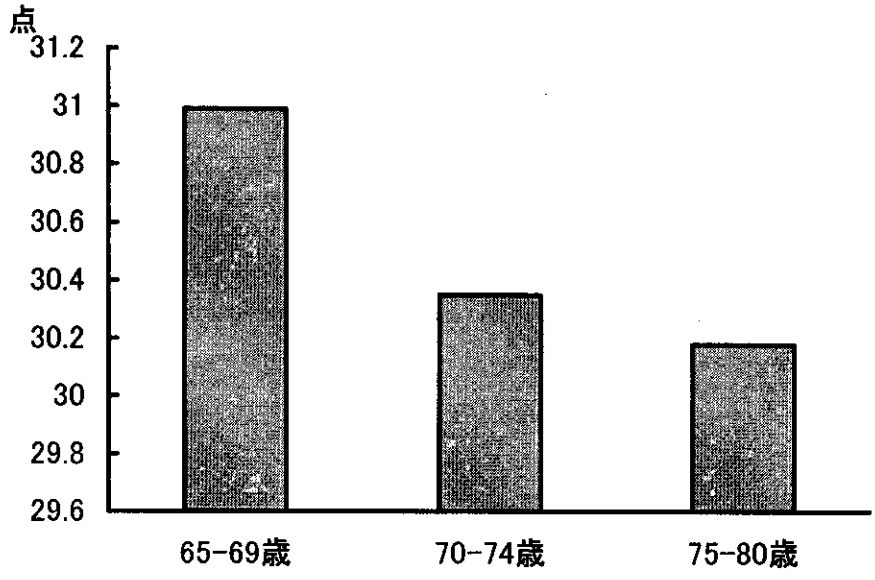

Figure2　年齢別QOL得点

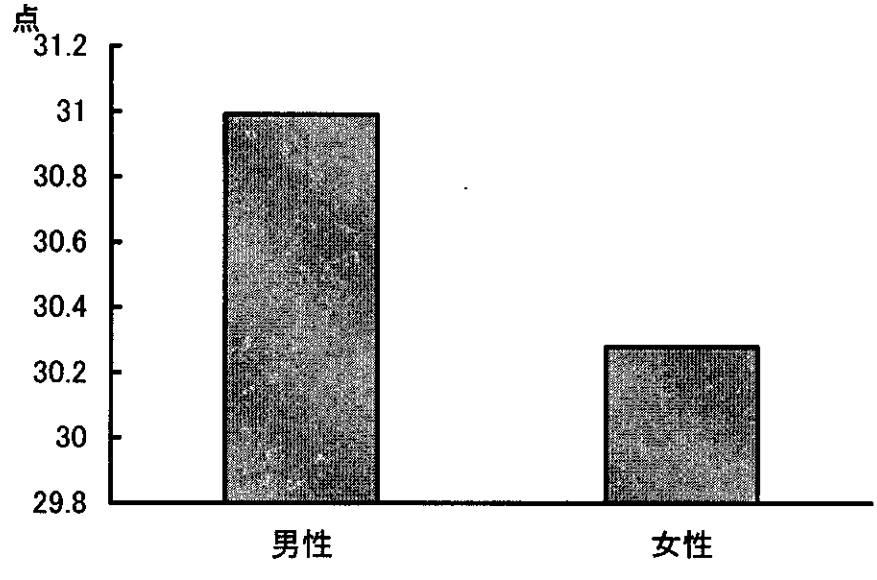

Figure3　性別QOL得点

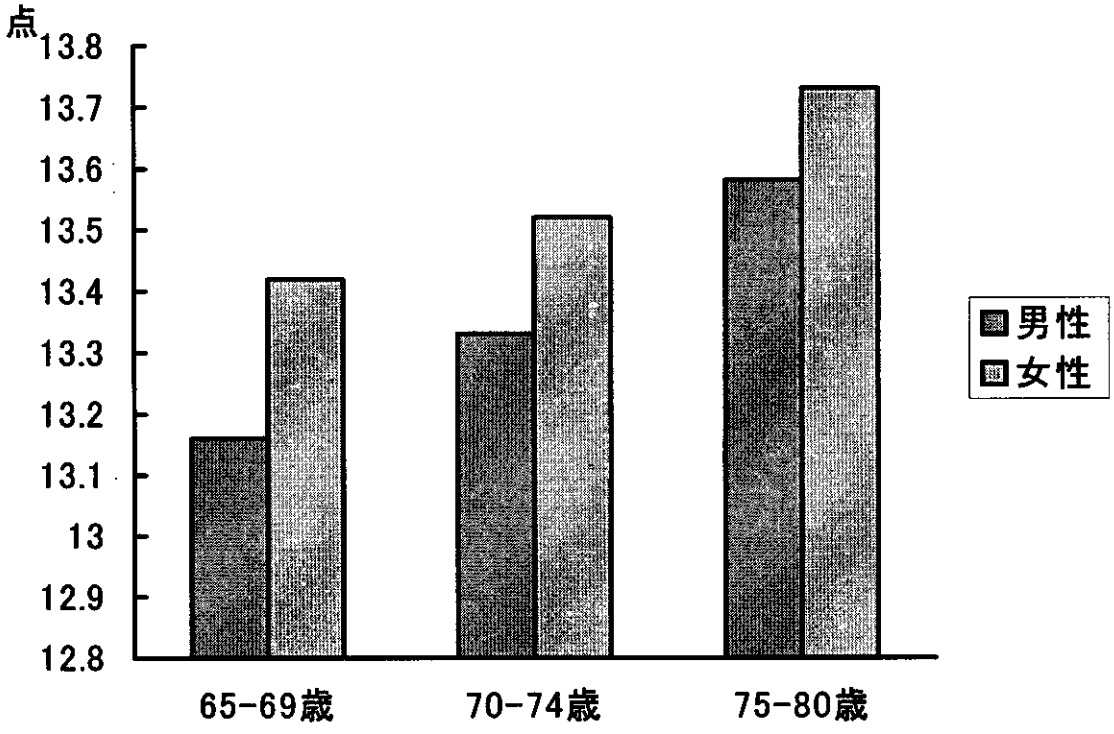

Figure4　性・年齢別住環境への満足得点

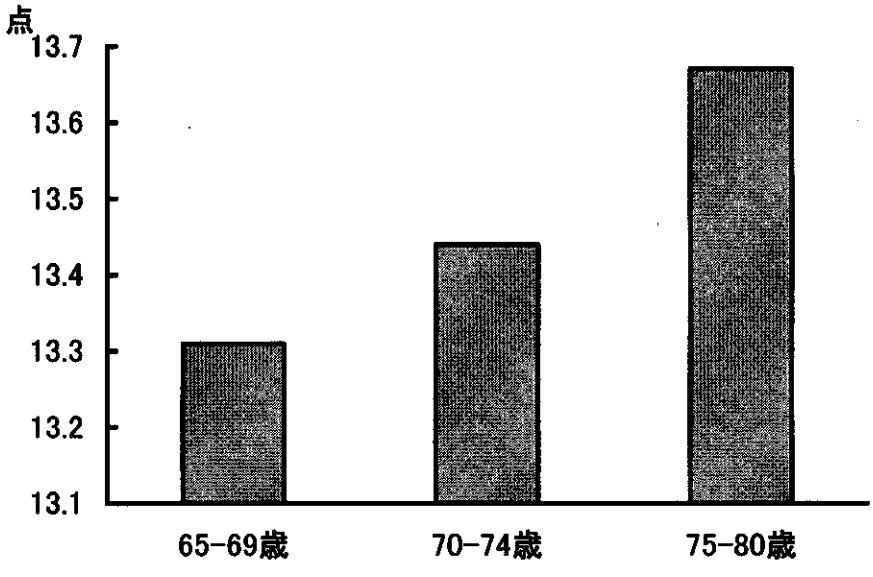

Figure5　年齢別住環境への満足得点

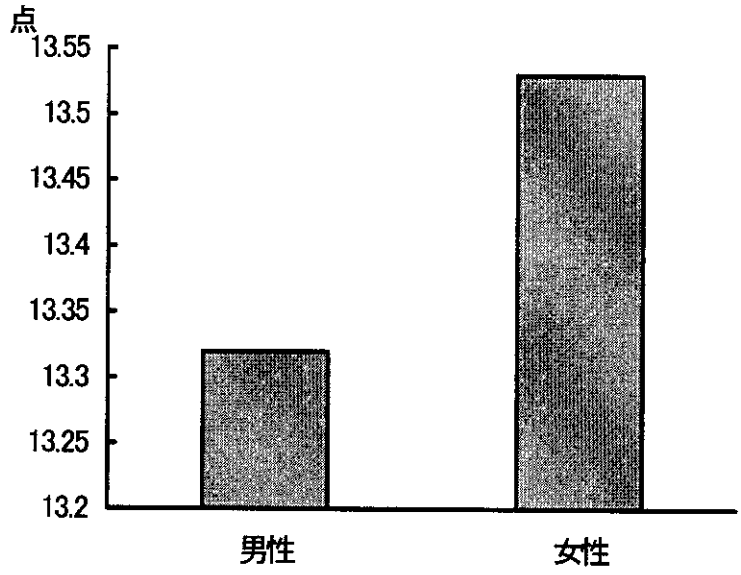

Figure6 性別住環境への満足得点

住環境に関する各項目の得点を独立変数，QOL 得点を従属変数とし数量化Ⅰ類を行なった．その結果，全ての年齢群において「近所への満足」と「住まいへの満足」が QOL に及ぼす影響が認められた（p<.01）（Table2～Table4）．

Table3 70-74群の数量化Ⅰ類の結果

変数	カテゴリー	N	アイテム・カテゴリー数量	範囲
近所の自然	はい	575	-0.05	
	どちらともいえない	86	0.55	0.77
	いいえ	94	-0.22	
近所への満足	はい	572	0.28	
	どちらともいえない	128	-0.54	1.96 **
	いいえ	55	-1.68	
永住の意思	はい	650	0.06	
	どちらともいえない	67	-0.34	0.40
	いいえ	38	-0.35	
自室への満足	はい	580	0.34	
	どちらともいえない	74	-0.37	2.00 **
	いいえ	101	-1.66	
住まいへの満足	はい	594	0.33	
	どちらともいえない	77	-0.89	1.89 **
	いいえ	84	-1.55	
	R^2			0.11

†$p<.10$　*$p<.05$　**$p<.01$

Table2　65-69群の数量化Ⅰ類の結果

変数	カテゴリー	N	アイテム・カテゴリー数量	範囲
近所の自然	はい	701	0.26	
	どちらともいえない	109	-0.23	1.64 **
	いいえ	115	-1.38	
近所への満足	はい	693	0.36	
	どちらともいえない	161	-1.20	1.55 **
	いいえ	71	-0.76	
永住の意思	はい	781	0.14	
	どちらともいえない	82	-0.74	0.94 †
	いいえ	62	-0.80	
自室への満足	はい	709	0.18	
	どちらともいえない	87	-0.36	0.93
	いいえ	129	-0.75	
住まいへの満足	はい	693	0.32	
	どちらともいえない	95	0.14	2.03 **
	いいえ	137	-1.71	
	R^2			0.14

†$p<.10$　*$p<.05$　**$p<.01$

Table4　75-80群の数量化Ⅰ類の結果

変数	カテゴリー	N	アイテム・カテゴリー数量	範囲
近所の自然	はい	446	0.28	
	どちらともいえない	89	-1.01	1.29 *
	いいえ	59	-0.59	
近所への満足	はい	449	0.33	
	どちらともいえない	109	-1.02	1.38 **
	いいえ	36	-1.05	
永住の意思	はい	550	0.06	
	どちらともいえない	26	-1.87	2.77 †
	いいえ	18	0.90	
自室への満足	はい	489	0.04	
	どちらともいえない	44	0.58	1.30
	いいえ	61	-0.72	
住まいへの満足	はい	479	0.47	
	どちらともいえない	57	-1.15	3.19 **
	いいえ	58	-2.72	
	R^2			0.13

†$p<.10$　*$p<.05$　**$p<.01$

（２）心理的に良好でないと思われる高齢者についての分析結果

調査協力者 2358 名のなかで，主観的健康感，QOL，GDS，住環境への満足感に関する項目への回答に欠損のない者は 1820 名であった（Table5）．さらに，QOL 得点が下位 25％かつ GDS 得点が下位 25%の 328 名を分析対象者とした(Table6)．主観的健康感に対する回答,「とても健康だ－まあ健康な方だ－あまり健康でない－健康でない」により 4 群に分け，それぞれＧＨ群，ＭＧＨ群，ＭＢＨ群，ＢＨ群とした（Table7）．

Table5　QOL･GDS得点分布

		QOL		計
		上位75%	下位25%	
GDS	上位75%	1084 59.56%	153 8.41%	1237 67.97%
	下位25%	255 14.01%	328 18.82%	583 32.03%
計		1339 73.57%	481 26.43%	1820 100.00%

Table6　分析(2)の対象者数

	65-69歳	70-74歳	75-80歳	計
男性	45 13.72%	40 12.20%	31 9.45%	116 35.37%
女性	67 20.43%	77 23.48%	68 20.37%	212 64.63%
計	112 34.15%	117 35.67%	99 30.18%	328 100.00%

Table7　主観的健康感の分布

	人数
とても健康だ （GH群）	32 9.76%
まあ健康な方だ （MGH群）	164 50.00%
あまり健康でない （MBH群）	88 26.83%
健康でない （BH群）	44 13.41%
計	328 100.00%

QOL 得点について，主観的健康感 4 群による分散分析を行なった結果，主効果が得られた（F（3，324）=6.00，p<.001）．多重比較の結果，ＧＨ群の方がＭＢＨ群とＢＨ群より QOL 得点が高く，ＭＧＨ群の方がＢＨ群より QOL 得点が高かった（Figure7）．

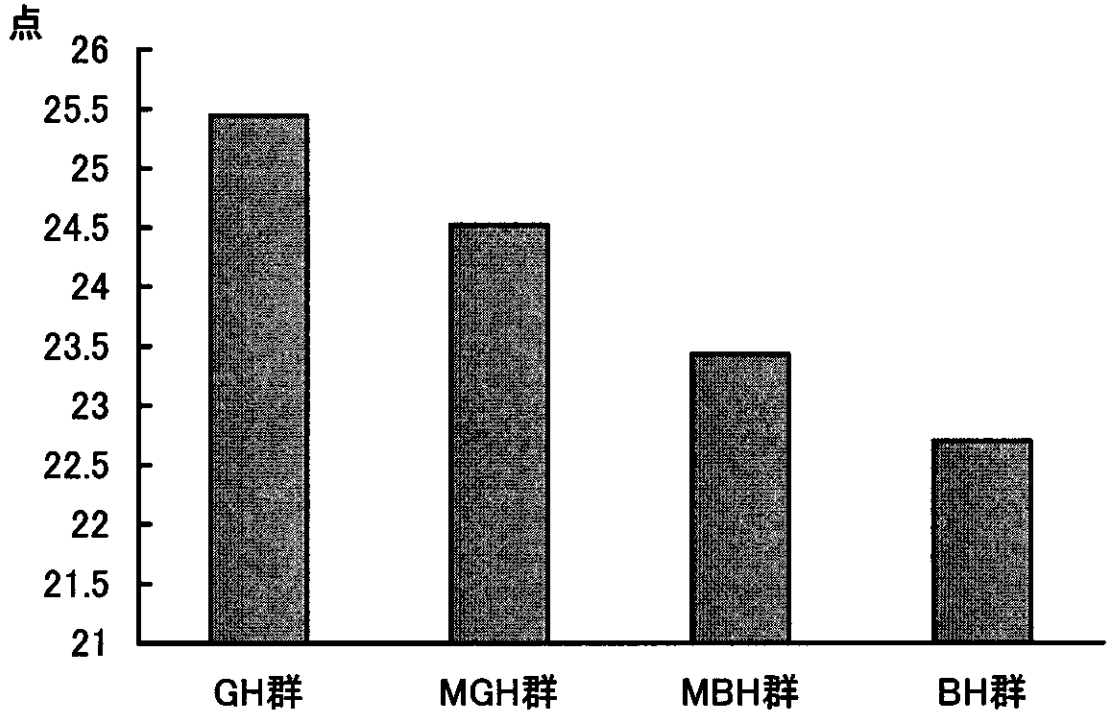

Figure7　自覚健康度による群別QOL得点

多重比較の結果，ＭＧＨ群とＭＢＨ群との間には有意な差が認められなかったため，これらを合わせてＭＨ群とした．ＧＨ群，ＭＨ群，ＢＨ群のそれぞれに対し，住環境得点を独立変数，QOL 得点を従属変数として回帰分析をおこなった．その結果，MH 群および BH 群において有意な回帰式が得られ，回帰係数は BH 群の方が MH 群より高かった（Table8）．

Table8 回帰分析の結果

		N	回帰係数	R^2
GH群		32	0.01	0.00
MH群	MGH群	164	0.41 ***	0.09
	MBH群	88		
BH群		44	0.87 ***	0.29

$*p<.05$ $**p<.01$ $***p<.001$

【 考察 】

全調査協力者を対象とした分析結果から，高齢者の主観的 QOL は年齢を経るに応じて低下していくが，それに対し住環境への満足感は高まるということが示された．また，「近所への満足」と「住まいへの満足」を高めることが高齢者の QOL を高めることに影響を及ぼすということが示された．これらの結果から，高齢者の QOL を高める，あるいは低下させないために住環境が重要な役割を果たすということが示唆された．

心理指標の得点分布をもとに抽出した心理的に良好でないと思われる高齢者を対象とした分析結果からは，先行研究と同じように主観的に健康であると感じている高齢者の方が，主観的 QOL は高いということが示唆された．この結果について，環境要因を用いてさらに分析をおこなったところ，自らの健康が悪化しているという自覚が高まるにしたがって，環境圧の影響を受けやすくなり，主観的 QOL への影響が大きくなるのではないかという関係が示唆された．

今後，住環境，QOL との関わりや住環境への満足感を高める具体的要因の検討が必要であると思われる．また，本調査は限られた地域におけるものであっ